

東京学芸大学

大学史資料室報

Tokyo Gakugei University Archives journal.



東京学芸大学
大学史資料室

Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

vol. **10**

目 次

『大学史資料室報』 vol.10 に寄せて 國分 充（東京学芸大学学長）	2
座談会 大学史資料室の歩みとこれから	3
東京学芸大学の歴史・資料に関するウェブサイト、デジタル・コンテンツの紹介	13
年表 大学史資料室 10 年間の活動記録	14
資料観 鈴木 明哲（芸術・スポーツ科学系教授）	16
『東京学芸大学新聞』と「日記」で再確認した 1950 年代の学生生活 鈴木 禹志（東京学芸大学卒業生）	19
2023 年 2・3 月 企画展示報告「大学広報誌『TGU』13 年間の軌跡」 牛木 純江（大学史資料室専門研究員）	27
メディアづくりで、人づくり。『TGU』とともに歩んだ学生たちとの広報活動 正木 賢一（芸術・スポーツ科学系准教授）	28
令和 4 年度活動報告	30

『大学史資料室報』 vol.10 に寄せて

國分充（東京学芸大学学長）

10年を越える以前となりますが、三重にある皇学館大学を訪ねる機会があり、併置されている神道博物館を見ました。皇学館大学は、神道に基礎をおく大学で、博物館が、大学の建学の精神を示す存在となっていることに深く感銘を受けました。そして、同時に、本学は、我が国を代表する教員養成系大学なのだから、それにふさわしい資料室というか博物館のようなものがあってしかるべきなのに、と強く思いました。それが、2012年、村松泰子学長の下、当時の藤井健志理事・副学長を初代室長として、大学史資料室が設置されたことは、ようやく我が国における本学の地位にふさわしいものができたと大変喜ばしく思いました。

その資料室が、昨年2022年に10周年を迎えました。この間、1872年の師範学校開学に遡ってのさまざまな資料の掘り起こし作業が進み、また、戦後大学として再スタートした本学にとってきわめて重要な木下一雄初代学長関係資料なども整いました。関係の方々のご協力のおかげで、所蔵資料もだいぶ充実してきたと思っています。

教員養成は、時の教育政策の影響を強く受け、時代・社会に応じて大きく変わります。近々では新課程の廃止、大学院の教職大学院化などがありました。これらは、つい最近我々が、身をもって経験した教員養成大学にとって、きわめて大きな歴史的出来事です。そうした事象が、現場ではどう進んだかを記録に残しておくことは、本学の「有為の教育者養成」と並ぶもうひとつの使命だと思います。

資料室の業務では、専門性と熟練に基づく資料の速やかな価値判断が必要とされます。また、資料の所蔵に関しては、DX化が強く求められています。こうした点をクリアしながら、精力的に作業が進めていくことで、本学大学史資料室が「公文書館等」の指定を受けることへの道も拓けてくるものと思います。

昨年は、学制公布150周年の年でした。天皇皇后両陛下がご臨席された式典も開催されました。今年、本学が創基150年を迎えるということは、学制が公布された翌年にすでに本学の基礎が築かれたということで、本学の歩みは、近代日本の学校教育の歩みと一致するということです。そうした本学に、資料室が置かれていることの意義に、あらためて思いを致しながら、関係のみなさま方のこれまでのご後援に感謝し、引き続きのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

座談会 大学史資料室の歩みとこれから

開催日時：2022年12月14日（水）13：00～14：30

開催方法：Microsoft Teamsにて

参加者（敬称略）：川手圭一（司会）、君塚仁彦、椿真智子、新免歳靖、日高智彦、
牛木純江、瀬川結美



川手：大学史資料室（註一以下、資料室）が2022年をもって10周年を迎え、そして『大学史資料室報』もvol.10を刊行するというので、資料室のこれまでの歩みとこれからの在り方について、それぞれの立場からご発言いただきたいと思っています。資料室立ち上げから10年を経る中で、皆さんが何を期待して資料室の活動に加わっており、またどのような課題をお持ちなのか、お話を伺うことができればと思います。

主に意識してお話いただきたいカテゴリーは、資料室の主たる業務の1つである、資料の収集・保存、それから公開についてです。特に近年、常設展示が開催できるようになったことは、とても大きなことだと思います。そしてそれは、これまで毎年特別展示を行ってきたことがあってこそだと思います。より資料室の存在意義を高めていくために、新たにチャレンジしていきたいことも含めお話しください。まずは君塚先生と椿先生、初期からのメンバーとして、これまでの経験上でお話ししたいことがあると思います。君塚先生、お願いします。

君塚：「年表 大学史資料室10年間の活動記録」を見ると、これだけの時間が経って、これだけ多くの蓄積がなされたのかと感懐を抱きました。資料室のホームページにも掲載されていますが、2010年に藤井健志先生を中心として、橋本美保先生、狩野賢司先生、私の4人で、本学が日本の教員養成大学の中で中核的な存在でありながら、教員養成に関する史資料の保存状況があまり芳しくないことへの危機感を共有したのが、資料室開室へとつながる最初の段階だったと思います。その2年ほど前から学内のプロジェクト研究で教員養成大学を

含めた全国の国立大学アーカイブズについて調査していたのですが、帝国大学等の前史を持つ総合大学では整備が進んでいるけれども、教員養成大学に関してはなかなか難しい状況があるということが分かりました。他大学の大学アーカイブズ関係の先生方にも大変お世話になり、いろいろと教えていただきました。そのような話をしながら、教員同士の動きを始めたことと記憶しています。しかし、教員だけではなかなか状況が動きません。そこで、事務の方にもご協力いただけることになりました。同じ問題関心を持ってくださっていた事務の方がいらっちゃったということが非常に大きかったと思います。事務の方々、特に管理職クラスの皆さんの動きが、私たちの問題関心、それからその後の動きを支えてくださったと思います。藤井先生が副学長としても活発に動いてくださったことで、当時の村松康子学長や理事の方々も理解を深めてくださいました。そのことも非常に大きかったと思っています。今日の資料室活動の礎になった時期が、2010年から15年ぐらいまでの間だったように思います。

事務の方の案内で、3人から4人くらいの教員で学内を回らせていただきました。とにかくいたるところに貴重な資料がきちんと保管されているのですね。特に、法人文書に関しては、それぞれの部署ごとに、事務の方々これが大切に置いておかなければいけないと、本学にとって大切な史資料なのだということで、それぞれの判断で、それぞれの場所にきちんと残されていたということが印象深く思い出されます。

大学アーカイブズは、年史事業を通じて大量の史資料が収集され、その後アーカイブズが開設されるようなパターンが多いのです。本学の場合、良好とはいえない保管環境でしたが、正門付近駐車場脇の倉庫に資料が大量に残されていました。本部棟などに残されていたもの、後に特定歴史公文書等になりうる資料などは、それぞれ部署ごとにきちんと「群」として保管されていたという記憶があります。図書館には東京学芸大学50年史を編纂したときの収集資料が整理保管されていました。そのような土台があって、大学史資料室のコレクションの礎ができあがっていったのだと思います。

また同時に、附属学校とか同窓会組織ですね、特に、成美教育文化会館に保管されてきた貴重な資料群ですね、撫子会が保管してきた資料群などがありますが、本学の礎を築いてこられた諸先輩方からいただいた協力も大きかったと思います。2006年に東京府豊島師範学校の同窓会組織である撫子会から資料が寄贈されています。2012年に資料室に移管されましたが、このような動きがアーカイブズ形成に非常に大きい影響を与えました。その後、東京府青山師範学校も含めて東京第一師範学校の同窓会から資料の寄贈があったのも非常に大きかったと思っています。

私たちが常に念頭に置いていたことの中に、公文書管理法に基づく国立公文書館等の指定と非現用法人文書移管の問題があります。これに関しては、課題として残っている部分がありますが、継続的に取り組んでいくべきことだと思っていますし、平成27年度文部科学省特別経費—文化的・学術的な資料等の保存等—により作成された師範学校アーカイブズのより一層の活用も今後の課題です。

それから、大学史資料室における展示活動ですね。大学アーカイブズといってもそんなに頻繁に利用される施設ではありません。まずもって存在自体が学内でも知られていませんでした。本学にもこのような貴重な本校史資料があること、そして、それらを保存管理して公開する施設があるのだということを周知することも目的としつつ、2013年度からは年に一度の展示会を行うようになりました。しかも当初は、教員と事務とが協力して手作りで準備が進められていました。室員である及川英二郎先生や椿真智子先生たちの活躍によってキャンパス景観の変遷など、学生からも高い関心を呼ぶような企画が次々と打たれていました。そして、展示での成果が蓄積され、現在の活動につながってなっているのです。2018年度に行った第6回展示会「小金井キャンパスと附属学校のあゆみ」では附属小金井中学校についての展示を行いました。この特別展示を通じ

て附属学校にも大量の貴重な資料が残されていることが改めて認識されるようになりました。

私が附属幼稚園長を務めていた時期に、小金井園舎管理棟の改修工事が入るということで、資料の整理が始まりました。PTA 活動によって作成されたものも含め、かなりの量の保育活動に関する記録資料をどうするのかということになりました。これは残しておかなければいけないという園内の声もあり、一時私の私物にした後で、資料室で受け入れていただいたことがあります。受け入れただけでは活かされませんので、成果として2019年度の第7回展示会「遊びのなかの学び—附属幼稚園の歩みと保育の継承」に結びつけることができました。その後、附属学校園に関しては、やはり校舎改修工事に伴う附属小金井小学校の資料の受け入れなどが、小金井小の前校長であり現室員の鈴木明哲先生の多大な協力で進められました。他の附属でも同様の動きが出てきています。

川手：ありがとうございました。今、君塚先生の方から資料の保存それから公開のことも含めて、非常に全体的なお話をいただきました。同じく長く資料室に関わってこられた椿先生に、設立時当初からの思い出も含めながら、特に椿先生は特別展示で非常にご苦労いただきましたが、そこも踏まえてお話いただければと思います。

椿：当資料室が開室してこの10年、あっという間でした。一方、今の大学史資料室の優秀な専門研究員・事務の方々を含む組織・体制は、開室後しばらくの手探り状態かつ個々人のやる気と体力勝負的な時期に比べ、まさに隔世の感があり感動すら覚えます。現在は非常にシステマティックかつ計画的に事業を進めてくださり、特別展示の開始から7年目ぐらいまでの準備・作業態勢とは全く異なる大学史資料室の姿を感じています。

私は約10年前、藤井先生からお声がけいただき、資料室に関わることになりました。私自身の専門である文化地理的な立場からいえば、学芸大キャンパスや周辺地域が、どのような履歴・変化をたどってきたかにもともと関心がありました。当時はほぼ毎日、日付けが変わる直前まで長時間大学で過ごしていましたので、自分の生活史的にもキャンパスや周辺地域を探求したいと感じていました。そうした関心は、学生と日常的にかかわる中で、数年間をここで過ごす学生たちにもぜひキャンパスや周辺地域に対する興味・関心をもってほしいという気持ちにつながりました。キャンパスや地域の風景・場所と日常の経験や想いなどメンタルな面をつなげられないかと考え、また自分史をきちんと歴史的資料と関連づけて検証可能になりうる貴重な機会をいただけたと思っています。ただし私は、博物館学的なことや展示自体の専門的な知識はほとんどなかったので、自分が日常的にやっているフィールドワークや歴史的資料の分析をどのように形にし表現すればよいか、どうやって多くの方に関心をもって見ていただけるものに仕上げられるかに試行錯誤で関わりました。展示パネルの作成も Cutter と物差しを手で一から学びました。毎年、展示準備の最後2週間ほどは連日睡眠不足状態でパネルをつくり、キャプション原稿を自分一人もしくは2名ほどですべて作成するという具合でした。そのおかげで、博物館や資料館などに行くと、このパネルはどんな素材でできているか、どうやって壁に貼り付けてあるのかなどがとても気になります。そうしたことも含め、自分の知識や経験の幅を広げさせていただく機会になりました。あとは、大学史資料室の活動と関連して、日々のゼミ活動や授業の一部で、学生にキャンパスと自分たちとのつながりを意識してもらえるような活動、例えばキャンパス・マップをつくったり、スタディーツアーを実施したり、景観写真を使って自己表現してもらったり、そういう形でリンクさせながら教育活動も進めてきました。

資料室の活動としては、やはり特別展示に最も関わってきました。私が中心的に企画に関わったのは、まず2013年度の第1回、2014年度の第2回におけるキャンパス全体と周辺地域の景観・土地利用の変化、地

図・写真資料の選定・作成です。そして2015年度の第3回では、高度経済成長期の学芸大と地域社会というテーマを企画しました。この第3回は、先ほどの自己の関心ともつながりますが、学芸大を広く地域社会の中に位置づけたい、地域社会とのつながりを語れないかというところから出発しました。現実はその簡単ではありませんでしたが、高度経済成長とともに急激に変貌をとげた周辺地域と同時代の学芸大の変化を主な内容にしました。地域社会と学生たちがどういう関わりを持っていたかのごく一部ですが、昔の学園祭（註一 小金井祭）のパンフレットがたくさん出てきて、そこから近隣地域における学生の姿を垣間見ることができました。そうした地域社会と本学・学生とのつながりという視点もまた面白いテーマです。産学官・地域連携が叫ばれる今、さらに検証していけたらと考えています。それから及川先生と取り組んだ昭和戦前期における師範学校の修学旅行に関する展示も、当時の女子学生の眼差し・地域認識と修学旅行のもつ意味を認識でき、強く印象に残っています。もう1つ中心的にやらせていただいたのが、2018年度第6回展示会「小金井キャンパスと附属学校のあゆみ」です。君塚先生のお話にもあった附属小金井中の貴重な資料を検討しつつ展示に結びつけました。特に教育実習関係の資料から、本学学生が実践していた授業内容を知り、大変驚きました。何十年も前の授業案から、今以上に極めて自由闊達な発想で多様な授業を展開していたことや、教科を問わず、現実社会や日常生活に根差した内容・素材が導入されていたことが見えてきました。過去の手描き資料を通じ、大学や附属学校の生活史や、公的資料からは見えてこない日常性をもっと掘り下げられたら非常におもしろいだろうとつくづく感じます。

最後に、自分の課題でもありますが、卒業生や長年お勤めの事務職員の方々に、ご自身の経験などをお聞きしたいと思い、数年前から少しずつ始めています。本学社会科1期生である佐島先生（註一 佐島群巳）にもお声がけをし、新型コロナもあって短時間でしたが一度お話をお聞きしました。現在地での開学後しばらくの貴重な時期のご経験談を伺いました。日を改めてまたじっくりお話ししますと言ったきり、その後コロナ感染が広がり、さらには一昨年、佐島先生が本当に残念なことにお亡くなりになってしまいました。卒業生のインタビューを通して、まさに日常の生々しいところを今のうちに伺っておきたいという願望が非常にあります。また、卒業生が所蔵されている資料や写真等がたくさん眠っているのは間違いないので、今後どう収集していくか、保管スペースや作業にかかる人的問題も大きいですが、引き続き検討していけたらと思っています。

川手：椿先生ありがとうございました。多岐にわたるいろんな観点のお話いただきましたが、特に印象深かったのは、椿先生ご自身の問題関心、研究領域に触れて、ご自身から見た問題関心と資料室とをつなげていただくようなところで、いろんなアイデアを出されてお仕事されてきたということです。

続いては、比較的最近資料室に入ってきた方々のフレッシュな観点からお話を伺いたいと思います。室のいろんなことをお願いしている新免先生、日高先生、それからあわせて牛木さん、この資料室で今後このような仕事ができたらいいとか、あるいはこういうことで自分の問題関心とつながっているというようなことも少しお話もいただければと思います。新免先生からお願いします。

新免：私は、これまで資料室の保存環境調査を担当されてきた服部哲則先生から調査等を引き継ぐという形で、資料室に入るように依頼を受けました。私自身は資料館などの保存環境調査が専門ではありませんが、以前に国文学研究資料館などの収蔵庫の環境調査に参加した経験もあり、保存環境調査には関心がありましたのでお引き受けしました。現在、資料室の環境調査に関わり始めたところですが、あまり問題らしい問題は起きておりません。ですが、日常的な収蔵環境などの調査を継続するとともに、持続可能な調査が出来る体制作りが必

要と考えております。環境調査には労力やお金がかかるので、牛木さんをはじめ職員の方々にご協力いただいておりますが、個人的には学生の力をうまく取り込んで、学生の学習の場として、実地調査の経験を積むために保存環境調査に関わってもら体制ができればよいと思っています。

先ほど椿先生がお話しされたキャンパスの景観の変遷をどのように捉えていくかということについても興味・関心を持っています。以前、学内に学芸の森環境機構という組織がありまして、そこで大学の自然環境を維持していくための活動に参加していました。この活動に参加して驚いたのが、学内の植物等を誰がどのように整備したのかよくわからないままに現状に至っているということです。そのため学内の環境がどのように整えられてきたのかを追っていくことや、記録として残していく必要があることを感じました。過去の記録を探すこととあわせて、これまで学芸大に関わってきた方々からお話をお聞きするというのも非常に重要だと思います。そういう意味では大学史資料室は文書館として文書を取り扱う組織ではありますが、卒業生とか教職員の方々も含めた個人個人の記憶をどのように収集して残していくかということも大きな課題ではないかと思っています。

川手：ありがとうございました。とても良いお話を伺いました。続いて、日高先生お願いします。

日高：私からは4つのことを発言します。まず、今回の『室報』が第10号、つまり資料室開室から10周年ということですが、東京学芸大学の歴史および資料室が収集している資料の歴史的な重みからすると、この資料室自体の歴史は意外と新しいということに改めて気づかされました。現在の資料室の体制が関係者の方々の努力によって短期間で作られたことをうかがうと、逆に、資料室発足以前にはこのような動きがなかったのか、疑問に思いました。そのことの検証も、必要になってくるのではないかと思います。

次に、私自身は自分の専門研究からすると、すでに集められている資料を読んできた人間で、資料を集める作業自体に関わるという経験をこれまでしてこなかったもので、機会があって室員に加えていただいたことは、今後も大事にしていかなければならないと思っています。私が入った時には、すでに図書館の中に常設展示ができるようなスペースが確保されていて、常設展示をどのように始めていこうかという段階から関わってきました。皆さんのお話をうかがって、資料を収集し、整理し、公開していくという作業全体を、早く学んでいかなければと改めて思いました。

3番目は、例えば私がこのまま健康に生きてとして、退職するまで20年ちょっとあるわけですが、現在の東京学芸大学を何らかの形で資料として残す、残さないという話になると思います。そのようなことを意識しながら、同時に、現在の常設展示などでは、師範学校時代とか敗戦直後の時代などの資料や展示が多いですけども、それよりももう少し後の、現在から20年、30年、40年前あたりの時期の資料を意識的に集める必要があるのではないかと思います。まだまだお元気の卒業生の方がたくさんいらっしゃいますが、今後その方々の資料の収集が大事になってくるので、自分がかかなり意識をしながらやっていかないといけないことだと思いました。

4番目は、やはり附属学校園のことです。特に今の学生たちに対する大学史資料室の意義を考えると、例えばかつての教育実習生が残した学習指導案だとか、附属学校園でどういう教育が行われていたのかなどは、意外と資料がまとまった形で残っているわけではない状況です。毎年、各附属学校園で行われている公開研究授業等の記録なども、もっと系統的に集めれば何がしかのことが見えるだろうと思いますし、現在は各附属学校園に任されているところがあつたりするので、大学史資料室がどういう社会的な責任を果たすのかという観点

から、収集し残していくべき資料も決まってくるのではないかとことを考えた次第です。私ももう少し自覚的に仕事をしなければならないなど、大変反省したところでございます。

川手：ありがとうございました。資料の収集と保存をどのようにしていくのか、これまでとこれからのことは、資料室の一番中心的な課題の一つなので、後ほど皆さんの話を伺った後で再度お話しさせていただきます。日高先生のお話にありましたが、附属学校園のことをどのように資料室が結節点となつてつないでいくのかということについて、これも大きな話題の1つですので、こちらも後ほどお話しさせていただきたいと思います。現在、室員や専門研究員、資料室の事務担当の方々のほかに、学生を巻き込みながら活動を掘りつつあります。それからOB・OGと附属学校園ですね。これらの人びとを資料室がつないでいくということも課題になろうかと思ひます。

続いて、牛木さんからみて専門研究員として、この間のお仕事を振り返りながら、資料室の在り方について少しお話いただけますか。

牛木：資料室のあゆみについて年表にまとめたのですが、その作業を通して10年間で多様な活動を行っていることの重みをととも感じました。資料の収集状況に関して、現在資料室ではいくつかの大きな資料群の所蔵があるのですが、収集をしている割に未だに整理が完了していない資料が多いことに非常に忸怩たる思いがしております。今後は、資料の収集のみならず、収集した資料を活用するためにどのように整理し、公開に向けた道筋をつけていくのかをしっかりと考えていかなければいけないと思っています。

資料の公開に関してですが、ここ数年の大きな動きとして、資料のデジタル化とその公開があります。資料を保存していくことはもちろん重要ですが、「もの」である以上どうしても劣化や傷みがでてきてしまうので、やはり少しずつでもデジタル画像として残して、それを活用・提供していくことができればいいのではないかと思います。Webサイト「教育コンテンツアーカイブ」の中の「師範学校アーカイブ」と「東京学芸大学アーカイブ」というページで画像を公開したり、資料室の情報発信サイト「Webギャラリー」において動画や画像を公開したりと、ここ数年で資料公開のための新たなツールができたのは一つの成果だと考えております。

展示に関してですが、これまで特別展示で年1回開催してきたものをもとに、2021年10月から常設展示を開始しました。2年サイクルで企画しており、来年(2023年)でちょうど1サイクル2年分が完了します。今後は大枠の内容はそのままに、一部展示物を入れ替えながら継続的に実施していく形になります。このようなサイクルを一通り作ることができたのは、非常に良かったと思っています。この間の常設展示では、授業等での見学や、コロナ禍の影響もあってまだ限定的ではありますが、外部の方々の来室・見学などもあり、見学された方々には比較的好評でした。ただし、宣伝活動が足りず、展示や資料室自体があることを知らなかったという声もまだまだ多いです。今後認知度を上げていくため、学生等への周知の仕方を考えていかなくてはと思っています。私は新型コロナウイルスが流行し始めたのと時期を同じくして資料室で働き始めたのですが、コロナ禍ということもあって当初はなかなか人と人との関わりが難しいと感じておりました。展示も対面で行うことができず、Web展示という形で行いましたが、その受け止められ方など反応がわからないことの大変さを感じました。ただし、コロナ禍の中で不幸中の幸いだったことは、博物館実務実習の学生を資料室で受け入れ、キャンパスツアーや大学紹介の動画の作成等を行ったことです。学生のみなさんは大変だったと思いますが、実習として参加していただく形で、資料室の活動に非常に深く関わっていただけたことはよかったです。今後は実習という形のみならず、学生ともっとコミットした形で活動していくことができればと思っています。

川手：ありがとうございました。資料の収集・保存・公開をいつも担われている牛木さんならではのお話だと思いました。特にデジタル化の話なども非常に大事なこれからの問題になってくると思います。

ここまでは皆さんにご自身の体験も踏まえたこれまでの活動について、それぞれお話しいただきました。ここからは、今後のご自身および資料室にとっての抱負についてお話しいただければと思います。例えば、教員養成系大学としての資料室のあり方であるとか、教員・職員・学生それからOB / OGなどを巻き込んでいくようなその結節点としての資料室の役割、これからの資料保存のあり方、公開のあり方としてのデジタル化の問題などが話題として挙がっていますが、それを踏まえて資料室のこれからのことについてお話しいただければと思います。まずは君塚先生、お願いします。

君塚：先ほど日高先生がおっしゃっていた指導案や実習日誌など、附属学校園の関係資料ですが、これは教員養成大学ならではの資料群だと思います。大学史資料室というのは、一つは記憶庫です、大学の様々な活動の記憶庫であるということ。人も含めて過去と現在と未来をつなぐ場であるという点。それから、大学のアイデンティティを確立し、発信していく場であるということ、そして、見落としてはならないのが教育研究の場としての資料室であるということです。これからは、大学教育の中でどう活用されるかが非常に重要になってくると思います。教職大学院も大規模になり、活動が軌道に乗ってきていることもあり、今後、教育実習そのものの研究も課題になっていると思われます。その時に、過去にどのような教育実習や研究がどのように行われてきたかを参照する意味は大きい。そここのころの意識がやや薄かったのではないかと日高先生の指摘は当たっていると思います。ですので、その点もこれからの課題になるのではないかと思います。指導案などの資料は、附属学校園との関係性の中で、公開やデジタル化の課題や可能性も含め収集対象にしていくことを考える必要があります。国立の教員養成大学ならではの新たなアーカイブズ形成ということにつながるのではないかと、それが1点目です。

2点目は、デジタル化の問題ですが、積極的に進めるべきだと思います。デジタル化された公開資料があることで、閲覧室に來られない方も利用できる。利用者の幅が広がりますし、デジタル化がこれからの鍵になると思います。予算的に難しい問題もあるので、各大学ともあまり進んでないのが現状ですが、デジタル化を進めることによって学生の利用も広がってくるのではないかと思います。同時に、最初からデジタルデータとして作成されたものに関しても、とにかく残していくということが大学史資料室としての役割なのではないかと思います。ただし、デジタル資料と言っても選別などの問題は残りますので、これからの研究課題だと思います。

もう一つ言うと、これまでの話はどちらかというと収集アーカイブズの話が中心ですが、今後は、教員養成大学における法人アーカイブズのあり方、公開のされ方が大きな課題になると思っています。先ほども述べましたが、国立大学のアーカイブズというのは、旧帝国大学の前史を持つ大学など規模の大きい総合大学が先行していますが、広島大学や東京外国語大学、小樽商科大学の例もあるなかで、学芸大が大学史資料室を作って、積極的に取り組んでいるということが徐々に知られ始めています。過去と現在、未来をつないでいくだけではなくて、人と人とをつないでいく。学芸大らしい教育学部ならではの独自性あるアーカイブズを志向していければと思います。

最後に一つ付け加えると、資料室室員に文化財科学を担う教員がいたことも大きかったと思います。服部哲則先生ですが、あまり良好とはいえない保存環境の中で、適切な管理が行われるように基礎的なデータを取り続けてくださったのは大きかったと思います。これからは新免先生にお願いすることになると思いますが、心から期待をしています。

川手：ありがとうございました。では、椿先生お願いします。

椿：主な課題は3つ、一つはお金・経済的な問題、二つ目はスペースの問題、あとはマンパワーの問題だと思っています。この10年間に様々な資料が蓄積されてきましたが、整理を進める時間や人力的な課題を常に感じてきました。君塚先生もおっしゃっていた人と人とのつながりとも関連しますが、様々な部署や人をオーガナイズしてサポーター的な人を増やしていくことも必要ではないかと思っています。実際どんな形が可能かはわかりませんが、たとえば本学は卒業生・先輩が首都圏だけでもたくさんおられるので、辟雍会あるいは各分野の同窓会的組織などの活動とうまく連携できるのではないかと思います。それから近年、本学で長年勤務されてきた教職員の方々がだいぶ減ってしまったように感じます。今はまだ非常勤として残ってくださっている方もおられますので、教職員の方々のご経験・記憶をオーラルヒストリーとして記録に残しておくのもこれまた重要です。あと数年するとほとんどご退職されてしまうのではとの危機感を覚えます。それから、やはり学生たちをどう巻き込んでいくかです。社会科学の学生なども専門的にはもっと大学史資料室に関心を持ってくれてもいいのではと思うのですが、意外と当資料室や資料の存在を知りません。学生を巻き込むための動機付けや仕掛けが必要だと思います。自分もあまりできていないので、もう少し授業や実習などと結びつけられるといいと感じます。また、自分の研究関心とも関連して、以前驚いた資料があるのですが、施設課に残っていた1960年代初期の学内のパノラマ景観写真です。そうした本学の写真は見たことがなく非常に新鮮でした。今関わっている環境教育研究センターには昔の農機具があり、現役で使用されています。それぞれの部署でその専門・職務に応じた独自の資料作成および残し方があることをあらためて感じました。私たちがまだ目にしていない教材、写真・動画等が学内に眠っているかもしれませんし、収集したけれども検討できていない資料もたくさんありますので、今後も新たな発見を求め、引き続き開拓していけたらと思います。

川手：ありがとうございます。どう資料室を広げていくのかというお話が中心だったと思います。オーラルヒストリーのこともそうですし、それから学生をどう巻き込んでいくのかということもそうだと思います。今後を考える時にとても大事なことだと思いました。では、新免先生いかがでしょうか。

新免：まずは収蔵庫などの保存環境に関してですが、現在、基本的な部分はしっかり押さえられており、大きな問題も起きていない状況です。図書館の地下収蔵庫や東6号館の一時保管室もそうです。ただし、それは今後問題が起きないということを保証しているものではありません。現状の課題として、収蔵庫には本来収蔵品のみが置かれるべきですが、ダンボールなどいろいろな資材も置かれております。そういったものをできる範囲で整理して、虫やカビなどが発生しにくい環境を整えていくことが必要と思っております。

保存環境の調査については、これまでは担当教員が測定データを年に数回程度報告するという形でしたが、適切な保存環境作りという観点に立つと、室員や図書館職員の方々も含めて、全員が気温や湿度といった情報にすぐにアクセスできて、現状を把握できるような基盤作りが必要ではないかと思っております。あわせて、資料室や図書館を使用する教職員や学生が、周囲に虫の死骸などを発見したら、その場所や虫の種類を報告してもらい、虫の発生状況に関する情報を共有することも重要だと考えています。そういうところから少しずつ資料室や図書館の保存環境に目を向けてもらい、日常的に適切な保存環境作りを担ってもらうことが重要だと思います。

デジタル化に関しては、予算の問題もあり、今後、何をデジタル化して、何をしないのかという優先順位や

選出方法を考えることが必要です。資料室所蔵の資料に関しては、戦前から戦後のものが多いので、あまり状態の良くない酸性紙が使われていると思われます。恒久的な保存を考えると、おそらく100年後には残らない可能性がある紙資料が多く存在します。そのため、優先的にデジタル化を進める資料を判別するために、来年度から収蔵資料の材質調査を進めていくことができると考えております。そのような調査結果を含めながら、資料保存の方法やデジタル化の条件などを整えたいと思っております。

川手：ありがとうございました。さすがに新免先生だから気づく事柄ばかりだと思いました。資料保存の方法、それから整備の問題ですね。続いて、日高先生お願いします。

日高：今年10月に大分県の教育委員会の方々が来訪される機会があったので、その先生方を最初に資料室にお連れして、解説付きで常設展（「附属小金井中学校の学びと生活」）を見ていただいたんです。すると、私が想像していた以上に興味を持たれたようでして、大分に戻られた後も展示のことについていくつかやりとりをしました。現職の教諭や指導主事である先生方は、普段から学習指導案などを作って、公開授業や研修を行っていますが、自分たちの上の世代の方々が実際にどのように授業をつくっていたのかを知る機会があまりない状態です。今回の展示は1950年代前半の附属小金井中学校の教育実習生の学習指導案でしたが、指導案の内容がいわゆる経験主義というか、生活に根付いた学習をする、例えば数学なんかでも自分たちのクラスで遠足に行くからそこまでの距離をみんなで計算して割り出しましょうみたいな話なんですけど、見学された先生方はそれにとっても驚いていたんですね。今回の学習指導要領の改訂（第9次改訂）で自分たちにとっては新しい課題である「主体的、対話的で深い学び」みたいなものを先取りしている、と。もちろん頭では知っていたけれど、あらためて非常に新鮮に見えたと、純粋に驚いていており、やっぱりこういうのって、自分を相対化できたり新たな発見があったりして面白いんだと思いました。意外とそういうことから着想を得て、その後の研究授業に活かしたりできるのではないかと思います。教育実習や学習指導案に関するアーカイブが、現実にもいろいろな意味で役に立つし、意義があるということを感じました。専門的な観点からいうと、単に学習指導案だけが残されていても学芸大学や附属学校園の特徴を読み取れるわけではないため、意味のある形で発信するための資料の整理の仕方の工夫ということが必要なのではないかと思います。いろいろな人が関わる中で、教員養成大学ならではの整理の仕方を考えていかなければならないと思います。

川手：はい、ありがとうございます。では続けて牛木さんいいですか。

牛木：皆さんもおっしゃっているように、資料の公開・活用のための整理・整備ができていないというのが、一つ大きな課題であると思っています。今年度、博物館学専攻の学生にアルバイトという形で、資料整理に入っただけでした。お仕事として携わっていただいたのですが、非常に勉強になったとの感想をいただきました。予算の問題などもありますが、このように学びつつ働いていただき、整理作業を進めるという形も含め、少しずつでも整理を進めていくことができればと思います。

既存の資料室の資源として、「師範学校アーカイブズ」があります。複数年かけて構築したシステムである一方、運用後の情報の更新やサイトの広報等の問題で、せっかくのシステムを生かし切れていないのではないかと感じております。「師範学校アーカイブズ」は師範学校の資料を大学横断的に検索できるシステムであり、学芸大学の枠を超えたところで活用していく方法を考えていけたらと思います。

それから資料の収集に関しては、大学や小金井地区の附属学校園の資料は少しずつ集まりつつあるのですが、世田谷地区や竹早地区などの附属学校園に関する資料はあまりない状況で、資料の収集状況に地域間の差があります。その差を均していくことが出来ればと思います。また、コロナ禍の中で現在止まっていますが、以前、附属高校との協働企画の話があったと聞いております。感染状況が落ち着いてきたら、附属学校と連動した形の資料調査や展示等を考えていけたらと思っております。

川手：ありがとうございました。最後に、大学史資料室の事務を担当して下さっている瀬川さんにもお話をいただきたいと思います。

瀬川：貴重なお話を聞かせていただきまして、本当にありがとうございます。先生方お一人お一人のお話から、様々な課題や展望を教えてくださいました。特に、本日お伺いしました資料室の可能性については、事務職員の間でも、ぜひ広く共有したいと感じました。資料室の活動や発信する情報が、本学の学生や卒業生はもちろん、教職員にとって、本学のルーツや本学がどんな大学なのかを知る拠り所になればと思います。また資料室は、教員を目指す学生にとっては教員養成の歴史と今を知り、考える場となりますし、学芸員等を目指す学生にとっては業務経験を積んでいただく場にもなっています。こうした大学の人や活動と結びついた資料室の在り方が今後も進展し、学内外の方に親しんでいただくと共に、資料室の意義を高め、厳しくもある運営状況を改善していけたらと思われまます。

川手：ありがとうございました。本当に必要な論点、大事な事柄をすべて皆さんから出していただいたと思います。まず感謝申し上げます。

大学史資料室の役割の一番大きな柱の一つは、教員養成系大学ならではのアーカイブ機能をいかに充実させていくのかということだと思います。公文書館指定の問題をまずはなんとかクリアしていかなければならないと改めて強く思いました。と同時に、それを超えてさらに、学生をはじめいろいろな人を巻き込んで活動を広げていくという新たな可能性がここには眠っているんだと感じました。皆さんの努力の甲斐もあって、この10年で少しずつ認知されてきましたが、まだまだこれから活動を広げていくために更にできることを着実に行っていきたいと思っております。本日は限られた時間でしたが、本当にありがとうございました。

東京学芸大学の歴史・資料に関するウェブサイト、デジタル・コンテンツの紹介

大学史資料室では、現在複数のウェブサイトにおいて、東京学芸大学および前身校の歴史に関するデジタル・コンテンツの公開を行っております。各サイトへは以下の URL、QR コードからお入りいただけます。

○東京学芸大学大学史資料室ウェブサイト



<https://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/>

資料室所蔵資料の目録を公開。資料閲覧の利用方法は
こちらから。機関誌『東京学芸大学史資料室報』も
公開中。資料室で運営している他のウェブサイトへも
アクセス可能。



○師範学校アーカイブズ



<https://archives.u-gakugei.ac.jp>

近代日本の教員養成史研究の基盤整備のために、全国
の各大学図書館が所蔵している戦前の日本の師範学校
に関する資料をデータベース化したもの。
戦前の師範学校に関する資料を大学横断的に検索可能。



○東京学芸大学大学史資料室 Web ガallery



<https://www.gakugeiarchives.com/>

資料室所蔵の資料画像や動画等デジタル資料を公開。
「今月の学芸アルバム」や『大学史テキスト』のほか、
キャンパスツアー「再発見！キャンパスから読みとく
学芸大」やウェブ展示「東京学芸大学の歩み その前
身と今」などの動画も公開。



○東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ



<https://d-archive.u-gakugei.ac.jp/>

東京学芸大学の教育・研究活動成果としてのデジタル
資源を収集・公開するプラットフォーム。学校教員のた
めの研修動画をはじめ、附属図書館特別コレクション、
大学の歴史資料「東京学芸大学アーカイブ」「師範学校
アーカイブ」などを収録。



年表 大学史資料室 10年間の活動記録

年度	年度活動概要	室員メンバー（敬称略）	年	月	行事・活動詳細		
2010年度	<ul style="list-style-type: none"> 資料調査WG立ち上げ 資料調査開始 		2010年	夏前	本学所蔵の大学史を含む教育関係諸資料の調査のためのワーキンググループ立ち上げ（メンバー：藤井健志、君塚仁彦、橋本美保、狩野賢司）		
				9月	資料調査のための学内巡り開始		
2011年度	<ul style="list-style-type: none"> 資料室立ち上げのための準備 			2011年	3月	東6号館2階の2部屋を改修し、倉庫内に保管されていた資料を緊急避難	
				秋ごろ	資料室の組織体制についての相談開始		
2012年度	<ul style="list-style-type: none"> 資料室開設 環境調査開始（データロガー設置） 他大学等の視察・調査（東京外国語大学、京都大学、神戸大学、附属世田谷中学校、東北大学、北海道大学） 資料燻蒸処理 	藤井健志（室長）、橋本美保、君塚仁彦、遠座知恵、椿真智子、及川英二郎、狩野賢司、服部哲則、鈴木明哲、山口寿夫		2012年	2月1日	教育研究支援部内に大学史資料室事務室設置	
				4月1日	大学史資料室開設（東京学芸大学大学史資料室規程制定）		
				5月31日	大学史資料室オープニングセレモニー		
				6月20日	大学史資料室パンフレット発行		
2013年度	<ul style="list-style-type: none"> 第1回展示会開催 他大学の視察・調査（北海道大学、広島大学、大阪大学、大阪教育大学） 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） Webサイト開設 『大学史資料室報』vol.1発行 	藤井健志（室長）、橋本美保、君塚仁彦、遠座知恵、椿真智子、及川英二郎、狩野賢司、服部哲則、鈴木明哲、山口寿夫		2013年	7月22日～8月23日	第一回展示会「學藝アルバム 学生生活とキャンパスの移り変わり」開催	
				2014年	3月31日	大学史資料室Webサイト完成・公開 『大学史資料室報』vol.1発行	
2014年度	<ul style="list-style-type: none"> 第2回展示会開催 50年史関連資料目録作成・一部 他大学の視察・調査（京都教育大学教育資料館、九州大学文学書館） 新収蔵室（図書館地下）設置 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 資料燻蒸処理 Webサイトの管理・運営 『大学史資料室報』vol.2発行 	藤井健志（室長）、橋本美保、君塚仁彦、遠座知恵、椿真智子、及川英二郎、狩野賢司、服部哲則、鈴木明哲、小正展也、山口寿夫		2015年	5月21日	附属図書館改修に伴う資料移送（教職大学院棟へ）	
					6月1日	専門研究員採用	
					7月29日～8月8日	第二回展示会「學藝アルバム 学生生活とキャンパスの移り変わり（2）」開催	
					1月16日～2月25日	専門研究員公募（平成27年度概算要求特別経費）	
					2月10日	成美教育文化会館訪問、既所蔵の豊島師範学校関係資料の所有権について整理	
					3月10日	附属図書館地下収蔵室に密集書架等設置	
					3月16日～20日	資料燻蒸処置	
2015年度	<ul style="list-style-type: none"> 第3回展示会開催 概算要求共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）の採択 旧師範学校アーカイブズシステムの構築及び一部公開 国内シンポジウム開催 他大学の視察・調査（愛知教育大学、東京外国語大学、京都教育大学、北海道教育大学、福岡教育大学、奈良教育大学、宮城教育大学、金沢大学、鳴門教育大学、名古屋大学、兵庫教育大学、大阪教育大学、群馬大学） 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 資料燻蒸処理、劣化資料の修復 所蔵資料目録作成・一部公開 Webサイトの管理・運営 『大学史資料室報』vol.3発行 	藤井健志（室長）、君塚仁彦、遠座知恵、椿真智子、及川英二郎、狩野賢司、服部哲則、鈴木明哲、小正展也、戎子卿、小峯康夫		2015年	3月16日～30日	資料燻蒸処置	
					3月31日	Webサイトに資料目録の一部を公開 『大学史資料室報』vol.2発行	
					4月20日～24日	資料燻蒸処理	
					7月24日～8月20日	第三回展示会「學藝アルバム 高度経済成長期の東京学芸大学と地域社会」開催	
					10月6日	大学史資料室主催国内シンポジウム「国立大学法人における学校教育アーカイブズの課題と展望」開催	
					12月～2月	資料修復	
2016年度	<ul style="list-style-type: none"> 第4回展示会開催 概算要求共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）の採択 旧師範学校アーカイブズシステムの構築及び一部公開 他大学の視察・調査（北海道大学、小樽商科大学、弘前大学、岩手大学、東北大学、福島大学、新潟大学、山梨大学、富山大学、三重大学、滋賀大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良女子大学、和歌山大学、岡山大学、山口大学、徳島大学、愛媛大学、長崎大学） 海外における調査 台湾（台南大学、台中教育大学、台湾文献館、国家發展委員会・檔案管理局、台北教育大学）、韓国（ソウル市立大学、慶北大学、漢陽大学、梨花女子大学梨花歴史館） 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 資料燻蒸処理、劣化資料の修復、デジタル化 所蔵資料目録作成・一部公開 Webサイトの管理・運営 『大学史資料室報』vol.4発行 	大石学（室長）、藤井健志（副室長）、君塚仁彦、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、小正展也、戎子卿、村上恭二		2016年	6月22日	第5回多摩地区文書館勉強会（当番）	
					10月27日～11月8日	第四回展示会「學藝アルバム 師範学校の歴史をふり返る」開催	
					11月14日～18日	資料燻蒸処理	
					11月19日～23日	台南大学、台中教育大学、台湾文献館 資料調査および国際シンポジウム打ち合わせ	
					11月28日～30日	台湾師範大学図書館 国際シンポジウムにて発表	
					2017年	1月～3月	資料修復・デジタル化
						3月21日～24日	ソウル市立大学、慶北大学、梨花大学梨花歴史館、漢陽大学 資料調査および国際シンポジウム打ち合わせ
						3月31日	『大学史資料室報』vol.4発行

2017年度	<ul style="list-style-type: none"> 第5回展示会開催 概算要求共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）の採択 旧師範学校アーカイブズシステムの構築及び一部公開 国際シンポジウムの開催 他大学の視察・調査（北海道大学、山形大学、千葉大学、東京大学、静岡大学、島根大学、佐賀大学、大分大学、宮崎大学、鹿児島大学、琉球大学） 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 資料種蒸処理、劣化資料の修復、デジタル化 所蔵資料目録作成・一部公開 Webサイトの管理・運営 『大学史資料室報』vol.5発行 	大石学（室長）、藤井健志（副室長）、君塚仁彦、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、小正展也、戎子卿、村上恭二	2017年	10月11日	資料修復
			11月14日～22日	第五回展示会「学藝今昔」開催	
2018年度	<ul style="list-style-type: none"> 第6回展示会開催 大学史資料室事務室の移転 法人文書の保存等に関する再検討作業 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 「撫子会」資料目録・資料公開 閲覧室の開設 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 『東京学芸大学大学史テキスト』発行 『大学史資料室報』vol.6発行 	川手圭一（室長）、大石学（副室長）、藤井健志、君塚仁彦、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、小正展也、松本功	2018年	1月10日	資料修復・デジタル化
			1月25日	NHKファミリーヒストリー取材・資料対応	
2019年度	<ul style="list-style-type: none"> 第7回展示会開催 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 「青山師範学校」「豊島師範学校」資料目録・資料公開 閲覧室の運営 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 「今月の学藝アルバム」開始 リーフレット作成・発行 『大学史資料室報』vol.7発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、藤井健志、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、木暮絵理、松本功	2019年	3月31日	『大学史資料室報』vol.5発行
			5月31日	Webサイトのリニューアル	
2020年度	<ul style="list-style-type: none"> 第8回展示会 Web公開 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 博物館実務実習受け入れ 「木下一雄初代学長」資料目録・資料公開 情報発信用 Webサイトの制作・公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 情報発信用 WEBサイトの開設 「今月の学藝アルバム」Web公開開始 リーフレット改訂版作成・発行 『大学史資料室報』vol.8発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、藤井健志、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、牛木純江、松本功	2020年	9月	大学史資料室リーフレットの制作・発行
			11月25日～12月9日	第七回展示会「学藝アルバム 遊びのなかの学び—附属幼稚園の歩みと保育の継承—」開催	
2021年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.9発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、牛木純江、高井力	2021年	2月22日	「撫子会」資料目録および資料の公開資料閲覧室の開設
			3月31日	『東京学芸大学大学史テキスト』発行 『大学史資料室報』vol.6発行	
2022年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2022年	2月	「その他師範学校」資料目録および資料を公開
			3月31日	『大学史資料室報』vol.7発行	
2023年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.8発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、牛木純江、高井力	2023年	3月	情報発信用 Webサイト「東京学芸大学大学史資料室 Webギャラリー」制作・公開 「今月の学藝アルバム」Webギャラリーにて公開開始 第八回展示会「学藝アルバム 東京学芸大学の歩み その前身と今」Web公開リーフレット改訂版を制作
			3月29日	「木下一雄初代学長」資料目録および資料を公開	
2024年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.9発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、牛木純江、高井力	2024年	3月31日	『大学史資料室報』vol.8発行
			6月	キャンパスツアー動画 Web公開 資料室事務室・閲覧室、図書館3階に移転 常設展示スペースの設置	
2025年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2025年	10月	資料閲覧室の開室
			10月15日～12月24日	常設展示「学藝アルバム 師範学校の歴史をふり返る 師範学校における学びと生活」開催	
2026年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.9発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2026年	11月～12月	博物館実務実習受け入れ（学生1人、大学史解説動画の作成）
			12月	「女子師範学校」資料目録および資料を公開資料デジタル化	
2027年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2027年	2月	「その他師範学校」資料目録および資料を公開
			3月31日	『大学史資料室報』vol.9発行	
2028年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2028年	4月12日～6月24日	常設展示「学藝アルバム 東京学芸大学のあゆみ 東京学芸大学の創設とキャンパスの移り変わり」開催
			5月9日	「教育コンテンツアーカイブ」リリース（師範学校アーカイブ、大学アーカイブに資料室所蔵画像資料を掲載）	
2029年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2029年	7月5日～9月30日	常設展示「学藝アルバム 東京学芸大学のあゆみ 附属小金井中学校の学びと生活」開催
			10月17日～12月23日	常設展示「学藝アルバム 東京学芸大学のあゆみ 大学での学びと学生生活」開催	
2030年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2030年	11月～3月	資料デジタル化
			2月～3月	企画展示「大学広報誌『TGU』13年間の軌跡」開催	
2031年度	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示開始 資料環境の調査・維持（温湿度測定、虫害虫捕獲調査、浮遊菌測定） 大学史資料室事務室・閲覧室の移転 閲覧室・展示室の管理・運営 博物館実務実習受け入れ 「女子師範学校」「その他師範学校」資料目録・資料公開 Webサイトの管理・運営 旧師範学校アーカイブズシステムの運用 資料のデジタル化 『大学史資料室報』vol.10発行 	川手圭一（室長）、君塚仁彦（副室長）、椿真智子、及川英二郎、服部哲則、金子真理子、日高智彦、新免歳靖、鈴木明哲、牛木純江、高井力	2031年	3月31日	『大学史資料室報』vol.10発行

資料観

鈴木明哲（芸術・スポーツ科学系教授）

「資料観」、こんな言葉はこの世の中に存在しません。資料館の間違いではなく、これは私が勝手に使っている造語に過ぎません。

歴史には、歴史観、教育には、教育観や児童観、指導観という言葉があり、人口に膾炙するところです。世の中広く見ても、人生観、世界観など、よく耳にします。何々観とは、「何々に対する見方、考え方」といったところでしょうか。哲学的な響きを感じられます。つまり、資料観とは、資史料に対する見方、考え方ということになります。今回のこの紙面をお借りしまして、私の資料観を披瀝させていただきながら、当大学史資料室の10年への思いとこれからを綴りたいと存じます。

私は当大学史資料室の開室から約4年間、室員として関わり、今年度から復帰させていただきました。専門分野は体育・スポーツ史研究であり、現在は第二次大戦後のオーストリアにおける体育・スポーツ史を研究しております。体育・スポーツ史研究に限らず、およそ歴史研究という領域は、過去の資史料の存在なくして成立しないことは皆様ご存じの通りです。私のこれまでの拙い研究成果の数々も資史料が残され、大切に保存されていたからこそ、書き上げることができました。資史料そのものもとより、国内外の図書館、資料館、文書館、さらにはプロフェッショナルとしてのライブラリアン、アーキビストの皆様には感謝に堪えません。

さて、資料観と当大学史資料室の話に戻りましょう。資料観とは、資料に対する見方、考え方ですが、これが基盤となって「どのような資料を保存するか?」、「どのような資料が保存するに値するか?」が決定されてくるように思います。つまり、資料室の中心に位置する理念であり、逆に申しますと資料室は、ある一定の明確な資料観を有していなければならないということになります。この理念というか、資料室哲学がなければ、「さて、それではどのような資料を保存していきましょうか?」という話にはなっていきません。収集すべき、保存すべき資料の峻別のためには、資料室にとって資料観は欠かせません。資料室のポリシーと言ってもいいでしょう。

ちなみに、皮肉ではありますが、自分たちにとって都合の悪い資料はさっさと廃棄し、都合の良さそうな資料だけを保存する、これもまたれっきとした資料観と言えましょう。資料が存在しなければ、すべてを「なかったこと」にできるのです。逆に資料さえあれば、「なかったこと」にはできず、逃れることは不可能でしょう。それほどまでに資料の存在、有無は、個人にとっても、組織にとっても重要なことでもあります。

果たして当大学史資料室において、明確な資料観が存在しているのでしょうか。あるいは共有されているのでしょうか。漠然としているようにも思われますし、存在していないようにも感じられます。これは今に始まったことではなく、開室当初から見え隠れしていたようにも思います。

しかし資料観の相違は仕方がないことだと思います。どの資料に価値を見出すかは、歴史研究者によってそれぞれ違いますし、その資料を「貴重だ」と感じるかどうかは人それぞれです。もっと言ってしまえば、歴史研究に従事していない世の中すべての人々にとって、古い資料は、「ただの紙切れ」なのかも知れません。

では、ここで私の資料観をお示ししたいと思います。大儀なことを述べて参りましたが、私には資料観がありません。「資料観がない」というのが、すなわち私の資料観であります。これはどういうことかと申しますと、資料には優劣はなく、モノであろうと紙媒体であろうと、映像であろうと、資料にはすべて等しく価値があり、そしてすべてが貴重だということになります。どの資料を保存し、どの資料を廃棄するか、そこに峻別の基準は設定しないということになります。乱暴に言ってしまえば、「とにかく資料全部を保存しよう!」ということに

なります。これが私の資料観になります。

この資料観が私の中に形成されたのは、1998年から2000年までの3年間、国立国会図書館の憲政資料室でGHQ/SCAP（連合軍最高司令官総司令部）傘下のCIE（民間情報教育局）文書を閲覧、収集していた頃でした。マイクロフィッシュ化されたアメリカ占領軍文書に関する基礎知識を得るために、資料の概要を説明している文献を読み進めておりましたが、とても惹きつけられた記述がありました。1952年の日本占領が終了した時に、占領に関する資料の一切合切をGHQ/SCAPが横浜港から1万個余りの段ボール箱に詰め込んでアメリカ本国に船で運んだというのですが、その資料の中には「会議が退屈なあまり落書きでいっぱいになった会議資料、観光案内パンフレットや浅草のすき焼き屋のマッチなど、占領行政とは直接関係のないものも含めて」（小川元「政治史料課所蔵 日本占領関係資料の概要」、『参考書誌研究』第38号、1990年9月、23ページ）詰め込まれていたそうです。選別作業を省き、玉石混交、すべての資料を段ボール箱に慌てて詰め込んでしまった様子がうかがえます。

ここには資料観のかけらも感じられません。しかも段ボール箱には「番号、部局課名、大雑把な内容を記したリスト」が付けられていただけで、整理など一切されていないままアメリカ合衆国国立公文書館・記録管理庁（National Archives and Records Administration：NARA）の下部組織であるワシントン国家記録物センター（Washington National Records Center：WNRC）に保存されているそうです（同上書）。しかもWNRCのキャパシティーは、サッカー場20面の広さに370万箱が保存されているというから驚きです（仲本和彦『研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド』凱風社、2008年、204ページ）。これこそが資料を大切にす態度、歴史を重視してきた態度であるような気がします。1952年の時点でさえ、およそ資料的価値が認められない観光案内パンフレットやマッチ箱まで、廃棄せずとにかく徹底して保存していくという態度には感服致します。このような資料状況であれば後世の歴史研究者らの想像もつかないような課題設定とその実証要求にも十分応えることが可能です。まさに理想的な資料の収集と保存であり、これに感化され、現在の私の資料観があります。

ある資料を保存すべきか否か、実は今日に生きている私たちには到底決められるものではありません。現在も当大学史資料室において本学に関する資料を着々と収集、保存しており、その際、常に保存か、廃棄かの選別を迫られます。私自身は、かつて実践史研究をしていた時期もあったので、授業や講義に関する資料に価値を置いてしまい、そちらの資料の保存に傾倒しがちであります。だが、こうして保存した資料が、100年後、200年後の歴史研究者の問題関心に合致するかどうかは全くわかりません。彼らのニーズに合致しない可能性もあり、その場合は「ただの紙切れ」同然になってしまいます。後世の歴史研究者らがどのような問題関心をもち、どのような歴史像の再構築を指向してくるのかは皆目見当もつきません。ただその時に、あらゆるニーズに応じてあげられるような、多種多様な豊富な資料をごっそりと残してあげたいと強く思っております。今は「ただの紙切れ」でも100年後、200年後の歴史研究者たちが魂を吹き込み、貴重な資料に変えてくれるのです。いつ来るか、全くわからないその時のために、当大学史資料室において資料を収集し、保存に汗しているのです。100年後、200年後、ある歴史研究者が本学及び本学附属校の歴史像を再構築しようとしたその時、それに応える資料が保存されていなかったらもうその歴史は書けなくなってしまうのです。これはとても残念なことで、その時私たちは記憶喪失になってしまうのです。

これは歴史研究者に限られた特殊な問題などではなく、私たちの将来を揺るがす看過できない問題です。例えば1997年に起きた神戸連続児童殺傷事件の裁判記録がすべて破棄されてしまったというショッキングな報道が2022年10月にありました。同様に長崎、岡山、名古屋の家庭裁判所でも、裁判記録をすべて破棄していたことが判明しました。つまり、将来、同じような事件が起きたとき、私たちは参照できる資料を一斉持っていない

ということになり、すべてをもう一度、一から構築しなければならないということになってしまいます。これは私たちの大学と附属学校園にも言い得ることで、何か新しいことをはじめるときや何か問題が起きたときに、その事象に関する資料が残されていなければ、すべては一から考えなければならず、不毛な議論に時間とエネルギーを費やすことになってしまいます。また、将来、私たちの大学と附属学校園にどのような問題や課題が降りかかってくるのか、想像だにしません。だから、あらゆる資料を保存しておくことが肝要です。

だが、そんな資料観も夢のまた夢、現実的ではありません。すべての資料を保存していくことなど到底無理なのかも知れません。そこには様々な理由がありますが、最も大きな問題は保存のためのスペースの確保でしょう。ですから何から何まですべて保存しようというのは、歴史研究者の戯言、暴論の類いなのでしょうか。保存スペースは無限ではありません。

WNRCのようなスペースは求めませんが、保存のためのスペースの確保は、目下、本資料室が直面している大きな課題です。せめて大学と附属学校園の規模に見合ったスペースの確保を策定し、大学史資料室が大学史資料館になればと願っております。これはまた当資料室開室以来の課題、悲願でもあります。10年を経ても未だに大学史資料室のままで、大学史資料館への光は見えてきません。

しかし、慌てることなくじっくりと時間をかけて実現させていくべき課題でしょう。当大学史資料室は、まだ10年を経たに過ぎません。歴史はまだはじまったばかりです。少しずつ資料を増やし、少しずつ資料館を形成していければ、やがて個性的な資料館になっていくことでしょう。悠々としていたいと思います。

当大学史資料室、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

『東京学芸大学新聞』と「日記」で再確認した 1950 年代の学生生活

鈴木禹志（東京学芸大学卒業生）

1. はじめに

私は、初等教育学科（以下甲類）社会専修の学生として、1955年に東京学芸大学に入学し、1959年に卒業した。1年と2年は、小金井分校で、3年と4年は、世田谷分校で学んだ。分校統合の5年前である。

1937年に東京の中野で生まれたが、1944年から1949年までの戦中・戦後の時期は、静岡県西部の天竜川ぞいの町で、仕事で東京に残る父と離れて、母と兄弟3人での疎開生活を送った。まだ戦災のあとが残っていた東京に戻れたのは、1949年の年末のことだった。

1955年に学芸大に入学できて、うれしかったのだろう。毎日、日記をつけていた。そのうちの1年生の時の日記だけは、長い間捨てないで持っていた。その1年間に、[されど、わが青春]の思いがあったからだった。

また私は、在学中の4年間ずっと『東京学芸大学新聞』（以下、『学大新聞』）の発行に携わっていた。『学大新聞』25号から55号あたりまでである。今回、大学史資料室で保管している『学大新聞』の当時のものを、ご好意で10号分ほど複写して見せていただけることになった。私としては、卒業以来約65年ぶりに自分たちの作った紙面と対面できた。するといっぺんに当時の記憶がよみがえった。複写した中には、自信作だった47号（1957年11月25日発行）の4ページ建ての『学大新聞』も含まれていて、うれしかった。

それに、国立国会図書館で閲覧できた、図書・雑誌・新聞記事などの当時の資料なども加えて、私が在学した1950年代の学生生活の不安や心配、課題や希望などを、実感的に考察してみたい。

2. 入学当初の不安、そして新しい友との出会い

1955年4月18日、世田谷の講堂で行われた入学式に続いて、19日からは小金井でオリエンテーションが始まった。20日は、午前中カリキュラムの説明があり、午後からはグラウンドで体力測定があった。21日に初めて教科別のクラスに分かれた。社会科の中で、歴史を選び、指導教官も決まった。23日は、学生会（当時の小金井分校の全学生の自治組織、自治会はまだなかった。）が主催する新入生歓迎会で、児童文化研究部の人形劇「きつねの裁判」、草原コールの合唱、放送研究部の放送劇「息子」などの上演があった。合間にお菓子まで配られ、会場の講堂は爆笑の渦に包まれた。

4月29日には、学生課と保健体育科の共催で、高尾山ハイキングが行われ、参加してみた。知った人は誰もいなかったが、集まった学生と一緒に見晴台まで登った。景信山から相模湖へ下るあたりで、偶然この年の1月の箱根駅伝に学芸大として参加したメンバーと会い、親しくなった。

授業が始まって驚いたのは、教室がお粗末なことだった。旧陸軍技術研究所の建物を改造して使っていたので仕方がないのだが、ちょっと大学の教室という気がしなかった。小金井の敷地は、この頃約36万平方メートルをこえる広大なものになっていたが、分校本館、社会科館を除くと、木造平屋建ての兵舎のような建物が50棟ほどばらばらに散らばっていた。（『学大新聞』32号の当時の写真には、原っぱに低い建物があり、大部分を広い空が占めている。鉄筋コンクリート造りの自然科学棟も建築中であったのだが。）本館のそばの学生ホールで

は、パンと牛乳（18円）の販売があった。図書館分館は、図書室としか言えない簡素さだったが、すいていたので、たびたび利用した。

講義には、なかなか集中できなかつた。卒業までに必要な単位数は、136単位、このうち一般教育科目が36単位、一般体育科目が4単位、専門科目が91単位、自由選択が5単位だった。専門科目には、教職科目（教材研究）が18単位含まれていて、1年生には、なかなか興味がわかかなかつた。自由選択は、4年間で5単位だが、1年生には心理学概論などしか用意されていなかった。迷った末、上級生になってから、私は大山敏子先生の英文講読を選択し、4単位をとった。自由に選択できる幅をもっと大きくしてほしい。

5月22日に、山口貞雄先生の指導で、地理研究室の野川流域の臨検が行われ、参加した。貫井弁天から野川沿いを歩き、国際基督教大学のがけ下あたりで、湧水を利用したわさび田を見学した。山口先生は、説明した後どんどん質問してくる。当てられても、すぐにうまく答えられなかつた。ただ、大学の近くにこんなにも武蔵野の自然が残っていることに感激した。地理研究室の秋の巡検（10月10日～13日）では、辻本芳郎先生の指導で、甲府、諏訪、伊那谷、豊橋、清水の中部地方を3泊4日で回った。途中現地で、愛知学芸大や静岡大の先生も加わって解説してくれた。子どもの頃、天竜川のそばで暮らしていたので、天竜川の源流の諏訪湖から完成直前の佐久間ダムまで見られたのは、貴重な体験となった。参加した学生の中に北村嘉行（1975年に東洋大学助教授、その後教授に。地理学。）がいて、北村の故郷の飯田線の赤穂駅（現在の駒ヶ根駅）では、ご家族からなしや栗などの差し入れがあった。

地理に関心があったが、選択したのは歴史で、指導教官は、結城睦郎先生だった。5月21日には、歴史グループの親睦会があった。歴史研究室では、図書の整理などの作業があった。さっそく明治維新をテーマにしたゼミがあるとのことで、その準備も始めなければならなかつた。

ところが、このグループのなかで、すぐに気が合う友人が数人でできてしまった。きっかけは、クラシック音楽に詳しいとか、高校でフランス語を選択したとか、そんなたわいのないことだった。武蔵野郷土館や浴恩館、遠くは深大寺付近まで歩きながら、お互いのことを話し合った。それでも話が尽きず、三鷹駅前の音楽喫茶「第九」（赤瀬川原平の「ぼくの昔の東京生活」にも描かれている。この本で、コーヒー代が50円だったことを思い出した。）に入りびたつた。さらにレコードでなく、生のオーケストラの演奏を聞きたいと、日比谷の野外音楽堂で週末ごとに行われていたコンサートに出かけるようになった。屋外の気楽な雰囲気でもクラシックの名曲を楽しんだ。

夏休みに入るとすぐに、葉山海岸に泊りがけで出かけた。友人の母が、企業の保養所の管理人をしていて（父親は戦死したが、昔その企業に勤めていた。）、彼は、葉山から毎日小金井まで通学していたのだった。それまでせいぜい江の島くらいしか行ったことがなかつたので、静かな葉山の海は別天地のように思えた。

7月21日からは、上野駅構内のホームでアイスクリームを立ち売りするアルバイトを始めた。7月と8月の上野駅は、旅行や帰省する人で、いっぱいになる。大学生が背中に大きなザックをしょって、北海道旅行に出かけるのが流行していたので、そんな姿の高校時代の友人をよく見かけた。20円のアイスを1個売ると、1円もらえる。7月31日には、814個売った。ふだんは、一日に600個くらいだった。

夏休みの間、クラスの友達から手紙やはがきがたくさん届いた。家に電話がなかつたので、手紙を出すしか、連絡の方法がなかつたのだった（テレビも家になく、外に見に出かけた。）。手間暇かけて、8月の終わりに久しぶりに友人たちに会うと、びっくりした。急に大人ぽくなっていて、以前のようにどう生きるべきかといった話は、あまりしなくなつた。

9月に授業が再開した。相変わらず、長机と長いすの殺風景な教室の講義には、気持ちがついていけない。離

れ島にポツンと取り残されたような気さえした。星野安三郎先生の憲法の講義のように、他教科の人もいっしょになって聞く方が、かえって気持ちが引き締まった。

小金井の学生会は、クラス委員会（学生会の議決機関、のちの自治委員会）で、11月の小金井祭のプログラムや学生歌制定（その後学生課の手で公募が行われ、入選作には賞金も出ると発表された。）が議論されていた。わがクラスも、小金井祭の演劇部門に参加しようということになり、準備が始まった。合唱コンクールにも出ようとした。私は、クラス雑誌「すばる」を発行しようと提案し、早速原稿を集め始めた。小金井祭の前日の夜遅くまで準備に忙しかった。11月11日は体育祭。11月21日の小金井祭第一日は、あいにくの冷たい雨、しかし、講堂での演劇はどれも熱演だった。24日が最終日で、合唱祭があった。広場で歌や踊りがあって、そのあとはみんなで吉祥寺あたりにくりだした。やっと夏休み前の一体感のある雰囲気に戻ったかと思われたが、この秋の行事の頃が頂点だった。しだいに、それぞれの方向に進みかけていた。

じつは私自身が、歴史なのか、地理なのか、社会学なのか、深く勉強したい目標がまだ定まらないままだった。しかし、学内を積極的に自分の足で歩き、自分なりに「大学での学びと学び方」を身につけようとしていた。また、新聞会の本部が世田谷分校にあったので、1年生の秋ころから小金井からときどき世田谷に出かけるようになっていた。新聞会では、上級生を交えた会の雰囲気が気に入っていた。1年生の仲間もでき、しだいに『学大新聞』の編集にのめりこむようになっていった。

3. 『東京学芸大学新聞』が伝えた、全教ゼミ

『学大新聞』の創刊は、1949年の7月で、ほぼ本学の発足と同時期である。東京第一師範学校新聞部が3つの師範を合わせて『東京師範学校新聞』（発行所は、東京師範学校新聞会とある。）を出したのが、『学大新聞』の原点になったと聞く。そのため最初から分校全部を合わせた、統一の大学新聞としての使命に徹してきた。最初は、ガリ版刷りの号もあったが、やがて活版印刷の発行となった。（『学大新聞』50号に詳しい。）私が入学する少し前に予約購読制が導入され、資金問題に心配がなくなって、1年に10回ほど定期的に発行されるようになった。活版印刷のブランケット判、2ページで、定価10円で学内各所のスタンドで販売した。

『学大新聞』で、主に取り上げられたのは、全日本教育系学生協議会（以下、全教学協）と全国教育系学生ゼミナール（以下、全教ゼミ）の動きだった。全教学協の結成は1952年で、全国の教育系学部の自治会の協議体として発足した。しかし、当初は大学側の理解が得られず、逆風の中のスタートだった。その後着実に、教職に就くことを目標にした学生団体として、学生生活や教育研究の問題に取り組んできた。全教ゼミは、教育系学生の資質を高めるように企画された共同的研究集会で、第2回は、1955年の12月に世田谷分校で開かれ、約1800名が全国の大学から参加した。私は、教育行政の分科会に出席したが、集まった学生同士の熱気ある話し合いや、助言者の星野先生のコメントに迫力を感じた。暖房のない、寒々とした教室での話し合いだったが、集まった人々の温かさがそこにあった。

『学大新聞』の記者として出かけたのは、1956年、愛知学芸大学岡崎分校で行われた第3回全教ゼミと1957年、群馬大学で開かれた第4回全教ゼミであった。また、1956年2月、長野市で開かれた全教学協の第5回大会にも参加した。

全教ゼミは、世田谷分校での第2回から、第3回、第4回と進むにつれ、いっそう充実した研究集団に成長していった。第3回からは、レポーター制（あらかじめ指名された人が、論点を整理して問題提起をする。）が

採用され、ゼミを質的に向上させる手立てとなった。参加者も第3回が2000名、第4回が2300名と増加していった。

第3回全教ゼミでは、冒頭上原専祿（『学大新聞』40号に要旨）、小川太郎両氏の基調講演があったが、学生新聞関係者が集まって共同デスクを組み、その講演要旨や各分科会の討議のようすをすぐにガリ版刷りの印刷で、参加者に配布した。とにかく、参加した学生の表情が明るく、自信に満ちて、元気そうだったことが印象に残った。

これには、長野の全教学協の大会で、第2回全教ゼミの反省が行われ、中身を充実させるには、どうしたらいいのかが真剣に話し合われたことがよい結果として出たのだった。取材で、宿舎に帰ってからも深夜まで翌日の討議をどう乗り切っていくか車座になって話し合う世田谷分校学生会の諸兄の姿を見て、頼もしいと思った。この大会で、世田谷の学生会会長の山崎真秀を、全教学協の代表としてアジア・アフリカ会議に派遣することも決まったのだった。山崎を支えるチーム学芸大・世田谷の力が強固で、どんな困難でも突破できるように感じた。それから約半世紀以上が過ぎたが、全教学協の活動の記録は、ほとんど残っていない。その後山崎は法学者（1994年まで静岡大学教授）として活躍したが、全教ゼミに参加する学生への心構えや留意すべきことを、教育誌や雑誌にたくさん書いて残してくれた。全教学協と全教ゼミの歴史を発掘し、本にまとめた土屋基規（神戸大学名誉教授）と並んで、山崎の功績は大きい。

全教ゼミの次に『学大新聞』が力を入れて報じたのは、学生運動の動きで、1956年の教育三法反対闘争や1957年の原水爆実験抗議の大集会などだった。教育三法では、1956年3月20日の朝日新聞で、東大の矢内原忠雄総長ほか10氏がこの法案は「民主教育を揺るがす」ので反対するとの声明を出したと報道された。本学の木下一雄学長もこの声明に加わっていた。『学大新聞』32号（1956年5月4日発行）では、「民主主義の教育を守れ」との木下一雄学長の論文を掲載している。

クラスでもこの法案についての討議を始めたが、学外の反対集会やデモにも参加したが、残念ながら新教育委員会法案だけは、6月2日に参議院で強行採決され、成立した。

1957年5月17日は、「原子戦争準備反対全国学生行動デー」だった。世田谷と小金井両分校で学生大会を開いて、ストライキを採択し、日比谷野外音楽堂で開かれた中央集会に参加した。50校、2万人にのぼるとされた。本学からも約2000名の学生が出かけたが、『学大新聞』43号（1957年5月30日発行）が伝えている。その2日前、イギリスがクリスマス島で水爆実験を強行したことへの抗議も含まれていた。とにかく、戦争は絶対に起こしてはいけないというのが、当時の学生の願いだった。

卒業生の就職問題にも読者の関心が高かった。1956年度の小学校課程の就職者数は370名で全体の約91パーセント、中学校課程の就職者数は174名で全体の約75パーセント。しかし国語、社会、家庭では、中学校への就職は皆無に近いと、『学大新聞』44号は伝えている。

『学大新聞』50号（1958年2月1日発行）では、1957年度の就職問題が「憂慮される状況」と書いている。採用試験の合格率は、63パーセントで、例年より20パーセントほど低い。都の新規採用の数もまだ決まっていない。大学側も、周辺地域にもどんどん進出してほしいとのことだった。

4. 『東京学芸大学新聞』が伝えた、サークル活動と学生生活

文化系サークルでは、小金井の児童文化研究部と世田谷の劇団創芸の活動がとびぬけていた。『学大新聞』45

号によれば、児童文化研究部は人形劇を持って、1957年の夏休みの間に、前期は都内、郡部、多摩、後期は山形、八丈島、大島など合わせて80か所で公演し、7万人もの児童に接したとのこと。また、世田谷の劇団創芸は、北海道巡演を企画し、留萌、夕張、函館、帯広、小樽などを巡り、小・中学生1万6000名あまりの児童に演劇を見せた。「疲れたけれど、熱心に舞台を見つめた児童の姿に感動しました。」と参加した学生は語っていたという。

運動部では、陸上競技部とバレーボール部の活躍が光っていた。

陸上競技部は、在学中とその前後に7年連続して箱根駅伝に出場した。私も第32回大会から第35回大会までの4年間母校チームを追いかけ、その回の観戦記を書いた。『学大新聞』49号では、1958年の第34回の箱根の登り（5区）と下り（6区）の母校チームの劇闘を伝えている。

「(往路) 箱根山中は気温も零下2度まで下がり、横なぐりにたたきつけるような雨で暴風雨模様。ゴール付近は濃いガスに包まれた。大野隆久先輩のリードで山を登った吉井(健彦)君もこの悪条件に災いされ、手首と頭が痛いと言いながら下村秀甫コーチの腕に倒れるようにゴールした。(復路) 箱根の山は、好天気。まず6区の山川(晴也)君が期待に応じて1時間19分台で山を駆け下りた。湯本から平坦地に入って前を行く神奈川大(芦ノ湖で約4分先行。)が見え、上板橋付近で追いつく。伴走の菅原時男コーチが両手を広げて引っ張るように先行する。ついに小田原中継所で、約30メートルリードする。(往路を終えた長谷川常次郎監督の話) 1区の内匠英夫がブレーキで、ここで勝負が決まってしまった。復路は、山川や上滝邦夫がいいので、やれるだろう。」

結局第34回は、13位だった。(参加校は、15校。)第32回と第33回は11位で、10位以内も狙えると感じたこともあった。東京第一師範から早稲田大学に進み、箱根駅伝で優勝した経験のある下村コーチがサイドカーから助言してくれたことも大きかった。また、箱根駅伝への参加を契機にして、師範時代を含めたOB.OGとの結びつきができた(1962年の陸上競技部の同窓会、獅友会の誕生)のも、箱根駅伝参加の大きな成果となった。

女子バレーボール部は、1957年の関東大学選手権で、前年に続き優勝している。東京教育大には、2対0のストレート勝ちした。9人制で、試合は屋外の土のコートで行われることが多かった。この年の7月には、大阪で、全日本大学女子バレーボール選手権大会があり、学芸大も参加したが、準決勝でおしくも東京教育大に0対2で敗れた。

学生生活の面では、『学大新聞』52号(1958年4月30日発行)が、学生のアンケート調査をもとに、学芸大生の経済生活白書を発表している。調査人数は、350名であった。

第1問、「あなたは、現在までの学生生活を満足に過ごしてきましたか？」との問いに、満足に過ごしたと回答した人は、20パーセント弱、不満であったと答えた人が、65パーセントとの結果となった。不満であった理由は、経済的に恵まれていないが5割近くを占めた。その次が、カリキュラムへの不満や就職難への不安であった。

第2問で、「1か月の平均生活費はどのくらいですか？」と聞いたところ、自宅からの通学生が5300円、下宿からの通学生が9200円となった。

「あなたは現在アルバイトをしていますか？」という問いには、自宅通学者の82パーセント、地方出身者の74パーセントがしていると答えた。

「あなたのアルバイトの職種は、何ですか？」という問いには、家庭教師が圧倒的で94パーセント、その他には統計表の整理、アコーディオンの伴奏、自転車による配達などとなった。

私自身もアルバイトに頼らざるを得ない状況だったので、小金井では学生課の紹介で、都心のデパートや東京

商工会議所の珠算検定の採点などの仕事によく出かけた。世田谷では、新聞会の先輩から家庭教師の仕事を紹介され、それを長く続けた。

5. 世田谷分校での学生生活と課題

世田谷分校での学生生活では、教科による専門科目も増え、落ち着いて講義を受けることが多くなった。ただ、歴史研究室は遠い存在になっていて、3年生になったのをきっかけに、経済学の越智元治先生を指導教官にいただき、矢島欽次先生の経済学の講義を受けた。

世田谷に進んだ直後、社会学の城戸浩太郎先生が南アルプスで遭難死されるという事故があった（遭難されたのは、本学助手の須賀晋一郎氏と学習院大学生の塚本栄二氏の3氏）。「来週山に出かけるから、休講にするよ。」と言って授業を終わられていたので、ショックだった。「3君を偲ぶ会」は、1957年5月25日に開かれ、青井和夫先生の司会で、搜索結果報告などがあつたと、『学大新聞』43号が伝えている。東大の日高六郎先生からも城戸先生の思い出が語られた。参加者は、日大や本学の山岳部、東大OBの搜索隊を含めて、約800名にのぼった。

社会科で同級生の松本良夫は、この会に出ていて、「この時、自分も社会学徒の末端に連なっていることを実感した。」と、「生涯—社会学徒（社会学的自伝）」の中で書いている。また、自身の東京学芸大の学生時代を振り返りかえって、次のように述べている。

「当時、東学大の社会学研究室には、そうそうたる社会学者がそろっていて、今井時郎、関敬吾、松浦孝作、青井和夫、浜島朗、田村栄一郎、城戸浩太郎の諸先生がおられた。（中略）授業以外の場でも、個人教授に近い形で指導を受けることができた。上級生との自主ゼミで最初に読んだのは、清水幾太郎「社会的人間論」であった。

（中略）学生時代は、自分で言うのも何だが、よく勉強した。社会学の勉強仲間（トリオ）がいて、春休みにマックス・ウェーバーを携えて温泉に行ったりもした。そのせいか、ともに公務員上級職・家裁の試験に合格して、法務省、家裁に就職した。後年、私も同様の過程を経て警察庁技官になったので、一時トリオは、（警察庁・法務省・家裁）に勤務していた。」

松本良夫は、1974年に本学助教授、1981年に教授となっている。在学中から研究室の調査に動員され、数々の調査実務を体験したという。

『学大新聞』47号には、読者から貴重な投稿があり、それは「サークル活動への疑問」との見出しで掲載されている。投稿者は、2年国語科、宮腰賢（まさる）とあつた。私はすぐ国語の教室に出かけて、宮腰賢に会って話をした。趣旨は、学生運動の高まりの中で、サークル活動の学問的研究がおろそかになっていないかとの問いであった。近頃すぐに国内外の情勢の分析を行い、行動方針を決定し、行動に参加することが多い。自分たちの学問的立場からの独自の主張を放棄していないかとの指摘だった。宮腰賢（1972年に本学助教授、その後教授に。国語教育学者。）は、当時からわが国の古典文学研究をもっと推し進めたいと述べていた。

確かに政治に対する態度を示すことと、研究室やサークルでの自主的な研究を両立させていくのは、やさしいことではなかった。しかし、もっと専門的な勉強を深めたいという願いも、学生の中に満ち溢れていた。

そして、1959年3月20日、東京学芸大学「第7回卒業証書授与式」の日がやってきた。卒業生は、全部で773名（総代星野圭朗）、甲類が505名、中等教育学科（以下、乙類）が268名だった。みんなおしゃれをして

いて、卒業式は、華やかな雰囲気だった。しかし私自身は、この時まで就職先が決まっていなかった。都の採用試験に合格しなかったからだった。先輩が心配してくれ、すぐに私立学校への道を確保してくれた。ただ、その世話になる気持ちになれず、何とか自力で新しい一歩を踏み出したいと願っていた。新聞会の仕事は、受験期が最高に忙しく、やっと一区切りがついたと感じたのは、もう4月の半ば過ぎのことだった。そこで考えたのは、できるなら『学大新聞』での経験が少しでも生きるように、子ども向けの図書や雑誌づくりの仕事に就けないだろうかということだった。

6. 山田暁生と、「ガンバレ中学生」

大学在学中は、まったく知らなかったが、1年後の1960年に東京学芸大学の乙類数学科を卒業したのが、山田暁生（あきお）だった。1960年4月に町田市の公立中学校に勤め、以後40年以上にわたって「学級通信やまびこ」を発行し続けた。子ども向け、父兄向け、教師向けの本も、50冊以上書いた。ラジオの子ども相談番組にも出た。

山田暁生に、1970年ころに、作家の山中恒の出版記念パーティーで会ったことがある。私は、小学生向けの学習雑誌の編集の仕事をしていて、山中には連載の読み物を依頼していた。山田は、すでに何冊かの書籍を出していて、教育現場の声を発信する教師として知られ始めていた。その当時忠生中学校に勤めているとのことで、「がんばって!」と、短い会話をしただけだった。

今回改めて国会図書館にある山田暁生の学級通信や著書を読み直し、まさに私たちの学生時代がそこにあるように思えたのだった。

「私の新任時代」との題の文章に、山田はこう書いている。

「1960年3月28日のことだった。（赴任先がいつまでも決まらないので）もう東京で教師をやるのはやめて、田舎に帰ろう。田舎に帰って、山の分校にでも入ろう。そう思って、帰省の荷造りを始めていた。そこに1通の忠生中学校からののがきが届いた。まだ、決まっていなかったのなら、見るだけでも見に来てくれないかとのことだった。午後になっていたが、早速はがきを持って学校に向かう。大変不便なところで、午後の2～3時台には1本のバスもない。駅からは、歩いて50分かかるといふ。でも、学校に着くと、まわりの田園風景が実にいい。校門を入るときから、働くのはここだと決めていた。校長に会って、即決!よし、4月最初からずっと願っていた教師になれると思うと、興奮してその夜は一睡もできなかった。」（この年は、東京都の小学校の採用試験は中止になり、中学校も厳しかった。）

山田の郷里は、紀伊半島南端の潮岬に近い町だった。生まれたのは、1936年フィリピンで、父は輸送船に乗って働いていた。その輸送船が、1945年の3月、ホンコン沖で米軍機の攻撃を受けて沈没し、父は亡くなってしまった。山田は、写真の父しか知らない。5人の子どもを抱えて、母は父が亡くなったあと、潮岬に近い町で水産加工の仕事などをしながら、必死になって子どもを育てた。山田は、5人兄弟の末っ子として、母の働きぶりをそばで見ていたのだった。

だから、学芸大を受験することだけでも、大変だった。東京までの往復の交通費、数日の滞在費などをどう工面するのか、国鉄運賃を割引してもらうのには、高校で学生運賃割引証をもらわなくてはならない。未納があつてすぐには出せないという。母が懸命に高校の事務に掛け合せて、やっと2枚の割引証を手に入れたのだった。

山田は、著書「続ガンバレ中学生」の中で、「私が先生になりたいと思うようになったのは、小学校5年生の

時だったと思います。そしてひそかに、教師として一生を送ろうと決心したようでした。」と書いている。また、学級通信「やまびこ」については、「わら半紙1枚の日刊紙です。1枚の原紙に来る日も来る日も、時には昼食をとりながら、時には会議中の内職として、あるいは就寝前の一仕事として、朝食前の指の運動にと、思ったことを下書きなしにガリガリ書きつけてきました。原紙は私の友であり、話し相手の父母であり、生徒です。毎日の学校生活の中で、それは、いくら汲んでも汲みつくせない、次から次へと湧き出る泉のごとく、教育の話題が湧き出てきます。その中の1つをその日の話題として“やまびこ”と一緒に考えましょと、語りかけてきました。」と書いている。

『ガンバレ中学生』(1974年)と『続ガンバレ中学生』(1976年)の2冊の本は、子どもの中に光を見つけて、それを励まそうと生涯をかけた山田の代表作といい、『続ガンバレ中学生』のもくじのページを何気なく見ていると、そこに(表紙・カット 山田南海司)との1行がある。びっくりした。『ガンバレ中学生』には、カットは山田自身が書いたとある。『続ガンバレ中学生』のカットは、山田南海司(やまだなみじ)と紹介があるだけで、詳しい説明はない。

しかし、山田南海司といえば、東京学芸大学の学生歌「若草もゆる」の作詞者である。1958年春に美術科を卒業し、その後は郷里の和歌山県で中学や高校の教師を長く続けた。「若草もゆる」は、1958年5月31日の第9回開学祭の式典で、数学科の佐久間威の作曲をつけて全学生に披露された。作詞には公募が行われ、入選作には、3千円の賞金が出たが、木工を専攻する山田南海司にとっては、その賞金が貴重な勉学の資金となった。「じつは入学当初、親と学資はもとより生活費を含めてすべて自分で賄うと約束したのです。」と語っている。

山田は、5人兄弟のうち4人が教師となっていると書いているので、南海司は恐らくご兄弟か、ごく親しい親戚にあたる方なのだろう。

「若草もゆる」の歌詞には、武蔵野や多摩川の自然が描写されているが、南海司には、その向こうに故郷の紀州の海の光景が広がっていたのではないかと。けれども、「われら数千の若人は、平和を愛し歓喜をうたう、獅子の星座の旗の下、希望輝くわが母校」のフレーズは、永遠に私たちの心をひきつける。

私たちの学生時代は、確かにまだ貧しい時代であった。いつも、厳しい逆風が吹いていた。だからこそ、逆風に向かって一日一日を真剣に生きなければならなかった。

参考文献

- 東京学芸大学新聞会 『東京学芸大学新聞』32号(1956年)40号(1957年)43号(1957年)44号(1957年)47号(1957年)49号(1958年)50号(1958年)52号(1958年)
伊ヶ崎暁生・山崎真秀・土屋基規 1969年『教育系学生の思想と行動』(上)(下)明治図書
松本良夫 2006年「生涯—社会学徒—社会学的自伝」(武蔵野大学現代社会学部紀要)
武蔵野大学現代社会学部紀要編集委員会 第7号
山田暁生 1974年『ガンバレ中学生』教育出版センター
山田暁生 1976年『続ガンバレ中学生』教育出版センター
山田暁生 1988年「私の新任時代」(児童心理 第42巻第12号)金子書房
東京学芸大学 1956年『東京学芸大学一覽』
遠藤満雄 2007年「若草もゆるの生まれ方」(辟雍 第4号)東京学芸大学辟雍会

2023年2・3月 企画展示報告「大学広報誌『TGU』13年間の軌跡」

牛木純江（大学史資料室専門研究員）

大学史資料室では、2021年より附属図書館3階の大学史資料室内において、1年間で3期（4～6月、7～9月、10～12月）に分け、常設展示を行っている。常設展示に加え、今年度は2023年2～3月の期間に、企画展示として「大学広報誌『TGU』13年間の軌跡」と題し、『TGU』全47号（2006～2019年）およびその前身誌である『キャンパス通信』の一部（2000年代を中心に）の展示を行った。

『キャンパス通信』・『TGU』は東京学芸大学の大学広報誌である。その起源は1968年5月に教務補導部から刊行された『教務補導部だより』にさかのぼる。内容としては、小金井祭をはじめ大学の各行事のレポートや教育実習報告、部活動やサークルの活動記録、新任教官の紹介や退職する教官のあいさつなど、学生の生活や四季折々の大学の様子などが掲載されていた。1977年9月発行の第54号からは教務補導部広報紙編集委員会（1979年7月発行の第69号からは学生部広報紙編集委員会）による『東学大キャンパス通信』に、1989年5月発行の第127号からは学生部発行の『キャンパス通信』となった。そして2006年6月発行のvol.196からは学生が企画・制作・編集に加わる形で『TGU』と改題した。

そもそもこの企画展示を行うに至ったきっかけは、今年、旧メディアラボで所蔵していた1999年以降の『キャンパス通信』23冊および『TGU』全47冊を資料室に寄贈いただいたことにある。『TGU』は2019年7月で冊子版を終了しWeb版に移行されたが、寄贈いただいた冊子版を並べてみると、企画や記事の多様さ、表紙デザインの色鮮やかさ、実際に手に取って読むことの楽しさなどの発見があり、ぜひこの魅力を多くの方々に伝えたいと思い、企画展示に至ったのである。

今回の展示にあたり、『TGU』の編集・発行に携わっておられた正木賢一先生に、『TGU』誕生の経緯や、学生たちの関わり方、当時の思い出についてご執筆いただき、冊子と共に展示した（次頁掲載）。また、『TGU』すべての冊子に透明なカバーをかけて保護し、資料室内において全冊を手にとって読むことができる形で配置した。実際に生の資料を手にとってみることで、制作に携わったひとびとの熱量を感じることができ、またそこに掲載されている記事や企画などは、今読んでみても全く色あせないものである。

次年度以降も常設展示休業期の企画の一つとして、展示を行う予定である。ぜひ一度ご覧いただきたい。



展示の様子

メディアづくりで、人づくり。『TGU』とともに歩んだ学生たちとの広報活動

正木賢一（芸術・スポーツ科学系准教授）

大学広報誌『TGU』が誕生したのは2006年6月。当時、広報戦略室室長だった私は、魅力ある広報メディアの必要性を感じていました。そこで目をつけたのが学生委員会の所轄する『キャンパス通信』でした。美術科の学生作品を起用した本誌の表紙デザインを手がけていたこともあって、リニューアル案が閃いたのです。すぐさま提案書（次ページの[資料]）を作成し委員会で披露したところ、まずは1年間のお試し発行が認められました。タイトルロゴを『TGU』へ、表紙モデルに学生を起用、全ページカラー、原稿依頼からインタビュー形式へ、そして新たなコーナー企画！などなど。学生たちとワクワクしながらアイデアを出し合ったことを今でも憶えています。『TGU』学生編集部のはじまり、はじまりです！

『TGU』づくりは、学生たちとの関わりに数々の有意義な時間をもたらしました。Vol.200 特別記念号では、「未来の自分へメッセージ」と題し学生教職員200人へのインタビューを敢行！学生たちの情熱が飛び火して展覧会イベントやプロモーション動画の制作にまで活動が広がりました。また、初の学外ロケとなる東京都大島町立さくら小学校の教育実習では密着取材にも挑戦！実習生の奮闘ぶりを追った一泊二日は、学生たちとともに「メディアづくり」の醍醐味を味わうひとときでした。さらに、本学創立60周年記念にあわせて制作したマスコットキャラクター「ぐうちゃん」をはじめ、「先輩道」「留学生1日デート」「HEART ON!」「満腹娘」など、学生たちのユニークな発想から生まれた企画が次々と立ち上がり、誌面も一段と楽しく華やかになっていきました。

スタートから6年ほど経ち『TGU』の所轄が藤井健志先生率いる広報企画室へと移り、編集母体となる「メディアアラボ」が本格的に始動しました。その運営を一手に担ってくださったのが、金ミンコン先生と加藤桂子先生です。お二人の手厚いサポートがなければ、『TGU』はここまで持続してなかったでしょう。取材交渉や日程調整、学生からの相談を受ける傍ら、『TGU』の編集作業に必要なDTPの勉強会も開いてくださいました。この放課後の自主的な活動は、卒業生や先輩たちが講師として後輩たちの指導にあたる「メディア講習会」へと発展していきました。やがて『TGU』もウェブメディアへの過渡期をむかえ、紙メディアとしてはVol.242を最後に『TGU WEB』へと収斂されました。ここから生まれた「せんせいのーと」や「きみは何をまなぶ科」などの魅力ある企画は、現在も「大学案内」や教育を面白くするメディア「edumotto」へと引き継がれています。

「自給自足の広報活動！」をモットーに取り組んできた『TGU』。企画から取材、編集、発信にいたるまで、ほぼ学生たちの手で創り上げてきたと言っても過言ではありません。こうした経験を糧に編集部を巣立っていった卒業生たちは、社会の様々な舞台で活躍されています。そんな姿に『TGU』を照らし合わせると、まさに「メディアづくりで、人づくり。」そうしみじみ思うのです。13年間にわたって学生たちと歩み創り続けてきた『TGU』は、私にとってかけがえのない宝物！そして、『TGU』を本学の歴史に僅かでも刻めたことを心から誇りに思います。

「キャンパス通信」リニューアルに関する提案 広報戦略室・室長 正木 賢一

現行の「キャンパス通信」について、以下の観点から全面的なリニューアルを提案いたします。

現行の問題点 (学生からのヒアリングをもとに)

▼お世辞にも魅力的で効果的な情報メディアになっていない▼学生たちはあまり読んでいない▼残部が構内に放置されていてむなしい▼誰に向けた情報なのかはっきりしてない▼毎号あまり変化がない▼内容が大学内向けに偏っている▼写真・イラスト・図解などビジュアル的な訴求が欲しい▼モノクロだけではさみしい▼レイアウト的な変化に乏しい…



令和4年度活動報告

〔主な活動・成果〕

- 大学史資料室今後の計画の策定
- 室員会議（11回）
- 運営委員会（3回）
- 常設展示会の開催
 - 年間企画：「學藝アルバム 東京学芸大学のあゆみ」
 - R4.4.12～6.24 「東京学芸大学の創設とキャンパスの移り変わり」
 - R4.7.5～9.30 「附属小金井中学校の学びと生活」
 - R4.10.17～12.23 「大学での学びと学生生活」
- 企画展示会の開催
 - R5.2.6～4.7 「大学広報誌『TGU』13年間の軌跡」
- 「今月の學藝アルバム」を Note café にて展示および Web ギャラリーにて公開
- 大学史資料室案内リーフレットの配布
- 大学史資料室報（Vol.10）の発行
- 旧師範学校アーカイブズシステムの運用（継続）
- 情報発信用外部サイト「東京学芸大学大学史資料室 Web ギャラリー」の運用（継続）
- 資料環境の維持（継続）
 - データロガーの設置による温度・湿度の測定
 - フェロモントラップの設置による虫害虫の捕獲調査
- 資料室所蔵資料の目録作成（継続）
- 資料の収集
 - 「附属小金井小学校」関係資料 等
- 資料のデジタル化

〔委員会等及び委員名簿〕

運営委員会

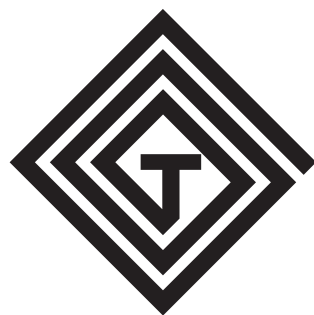
- ◎川手圭一 副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授
君塚仁彦 総合教育科学系学系長・教授
木村 守 人文社会科学系学系長・教授
國仙久雄 自然科学系学系長・教授
中地雅之 芸術・スポーツ科学系学系長・教授
金子真理子 先端教育人材育成推進機構教授
新免歳靖 自然科学系講師
関田義博 附属学校運営部運営参事
東 高之 総務部長
◎は委員長

室員会議

- ◎川手圭一 副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授
○君塚仁彦 総合教育科学系教授
及川英二郎 人文社会科学系教授
椿真智子 人文社会科学系教授
日高智彦 人文社会科学系准教授
新免歳靖 自然科学系講師
鈴木明哲 芸術・スポーツ科学系教授
金子真理子 先端教育人材育成推進機構教授
牛木純江 専門研究員
高井 力 アーカイブ室長
◎は室長
○は副室長

東京学芸大学大学史資料室報 Vol. 10

令和5年3月31日発行
東京学芸大学大学史資料室
東京都小金井市貫井北町4-1-1
メール：shiryou@u-gakugei.ac.jp



東京学芸大学
大学史資料室

Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

